
sweet Island ~ 妹達とお兄さん ~

sorapon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sweet Island ～妹達とお兄さん～

【Nコード】

N7382Y

【作者名】

sorapon

【あらすじ】

主人公「高ノ宮 甲太^{たかのみやこうた}」は3年前、仕事の関係で故郷の島を離れる父親と共に本州へと渡った。しかし3年間の間にいい思い出は無く、仕事を済ませた父親に言われた故郷へ帰るかという問いにすぐに肯定の返事をした。本州から船で40分、そこそこ広いが自然の多い目立った産業のない田舎の島、赤垣島。故郷の家には三人の家族が居る。二人のクールな妹達と、甘えたがりな美人の母親。父親と共に船の上から甲太は、甘い明日に胸を躍らせていく。

注意 * 更新がかなり稀になると思います。期待しないで妄想しながらお待ちください。

今ジャンルがコメディじゃなく文学になっているミスに気づいたのですが、いやこれ逆にミスじゃないのでは？つまり妹萌え〓文学と
いうことを神様が教えるためにこんなミスを・・・。

こんにちは赤垣島！

船の警笛が聞こえる。

島に着くまで後15分程か。

背中荷物が重いけど、今の気持ちに比べれば全く問題ない。

風が気持ちいい、鳴き声を上げながら飛ぶ鳥達を見ると心が踊る。

3年ぶりの故郷だ。

そう思うと、昔別れた顔がいくつも浮かんでは消えていく。

「早く会いたいなあ」

本土のほうでは、内気で友達も少なかった。

けどきつとこっちは違う、普通にやれるはずだ。

「甲太、もうすぐ着くから準備しておけ」

「わかってるよオヤジ、準備は出来てる。」

背に背負った大きなリュックの重みを感じる。

逆に言うなら、本土での思い出はこれだけだ。

島での思い出に比べたら、軽いことこのうえないな。

* * *

俺たち親子を含めて十数人という少ない乗客を載せた船が港に着いてから数分。

「おいオヤジ、母さんと由美はどこだ」

「俺に聞くなムスコよ」

真夏の日差しの下、直立不動の二人の男。

俺が他人なら絶対に視線を合わせたくない何かがある。

待ち合わせ場所がこんな日陰もないような、時計の下なんて所じやなければ……

俺たちの目が濁り始めた頃に、細かい傷があちこちに入った軽自動車走ってくる。

そのさまは暴走しているようで、俺は向こうでよくやっていたゲームのことを

「つてあぶねえっ!?!」

「あぁっつっつう」

オヤジがエコー付きの悲鳴(?)を上げてはねられる。

ああ、合掌。

「遅れてごめんねっ!?!港にくるのなんて久しぶりだから迷っちゃって!」

扉が勢い良く開いて、背の高いスレンダーな美人が出てくる。

というか、母親だ。

マザコンではないが、息子eyeから見ても美人な母親だ。

「いいよ母さん、そんなに待ってもいないし。久しぶり」

「あーコー君っ！久しぶりー」

さすがに抱きつきはしないが、手を握ってブンブンと振る。
痛い。

「まていムウスウコウよ！父より先に母と触れ合うとは何事だ！」

怪人海坊主が現れる。

どうやら落下地点が海だったらしい、惜しい。

「あなたっ！」

「ミスウィートハニーツ！」

F1かくやという速度ですっ飛び。

ラブオーラをまき散らしながら、若干40半ばの夫婦が抱き合う
姿は一種恐怖を感じる。

特に親ともなれば。

「あれ、そういえばユウとマコは？」

「あれ？ユーちゃん達先に行ったはずなんだけどなー？」

我が妹達の姿が見当たらない。

「ふっふっふ、久しぶりの愛しの父との再開が恥ずかしくて逃げ
てしまったかな！」

「逃げたいよ、そのラブオーラ夫婦と変態から」

声が聞こえる、どこだ。

視線を巡らせると、港の端、売店前の日陰にあるベンチで優雅にくつろぐ二人の少女を見つける。

「おかえりなさい、兄さん」

「おかえり変態共」

艶やかな黒髪のショートポニーと、腰に届きそうな長さのロングヘアを揺らして二人がこちらに歩いてくる。

二人とも俺の妹、名を由美ゆしみと繭子だ。

ちなみに、マユ 繭子、口が悪い方 は自分の名前が嫌いだ。虫を連想するから。

久々に会った二人は3年しか期間は空いていないというのに、見違えるほど美少女になっている。

胸は二人とも発育しきっていないが。

「ただいまマイドクターズッ！」

父親が抱きつこうと飛びつくがよけられて海に帰る。そのまま海坊主になればいい。

それを視界に入れないようにしながら、久々にあった妹達に、最上の笑顔を向ける。

これからは一緒に暮らすんだ、昔からベタベタとしている兄弟ではなかったから、これからはできるだけ仲良くしたい。

ユウは少し不安そうに、マユは暑いのだろうか苛ついた表情だ。

これからよろしく そんな言葉を込めて、おかえりに返事をする。

「ユウ、マユ」

ただいま、これからよろしく

家事が好きなわけじゃないけど

目覚ましに使っている、携帯のメロディで目が覚める。

時刻は5時45分、セットした時間とズレがある。

最近の携帯は五分钟前行動を心がけるのだろうか、初めて知った。

取り敢えず目覚めはいいので、脱いで、着る。

女の子ならこれだけで数分かかるのだろうか、妹に聞いてみたい
がマユに聞くとひどいことになりそうだ。

主に俺の心が。

「しっかしこの島は気持ちがいいなあ」

本土に居たときのマンションは窓から入る光すらなかった。

けど、島の家 今居る和風の部屋は風通しもいいし、明かりを
つけていないのに明るい。

これが 充実感 。

何はともあれ、まずは家事をすることにする。

何故男の俺が家事をするかと言えば、昨日母に言われたからだ。
以下再現。

「コー君、コー君」

「何、母さん」

「家事得意だったよね？」

「うん、料理は自信あるよ、あと洗濯とお風呂洗いなら普通に」

「じゃあね、朝ごはん、これから毎日私のために作って？」

というわけだ。

もちろんわけの分からんプロポーズみたいな発言にはツッコミを
入れた。

この家は、あの港から車で十分程しか離れていないため車のなかでは久々の再開を存分に分かちあえなかった。

と言うより、妹達は気まずそうにしていたのだ。女だけで暮らしていたところに俺という男が来たからだろうか。

ちなみに皆さん何か言いたいかもしれませんが、父は海に捨て置いた。

家に着くと以前使っていた、こぎつぱりとしてしまっていた自室に荷物を運びこんで、手伝って疲れたのだろうかユウはすぐに寝てしまった。

マユは手伝いもせず部屋に戻ってしまったのでわからないが、とりあえず昨日は夕飯抜きだったため、俺はお腹がすいてる。

というわけで現在、家事実行中。メニューは特に変哲のない物だ。個人的には美味しければいいという、こだわりのないタイプなので和洋折衷だ。

他の皆の分も作って置いて、自分は少しだけ摘むと台所を出る。理由としてはまあ、最初のご飯は一緒に食べたいってだけなんだけど。

そこそこ広い家なので、移動は大抵が廊下を挟む。

かつたるいけど、それでも島に居るといふ幸福感を感じられるの
でいい。

任された 言ってきたのは母さんだけが 家事は料理と洗濯、
なので洗面所へ行き洗濯カゴの中身を選別する。

家事にこだわりがあるわけじゃない。ただ、妹達も含め女性は服にうるさいと思うので、纏めずにちゃんと分けて、方法通りに洗う
つもりなだけだ。

昔家に居たときは今やってる作業も全部、母さんと妹達がやって
くれていたんだなあ。

今更に頭が下がる。

冷たい口調で暴言も吐くマユでさえやってくれたのだ、いや別に嫌いじゃないし大事な大事な妹なんだけどイメージはわからない。

しかしこんな仕事を母さんが任せてくれたのは嬉しいことだ、素直に俺はそう思う。

ワンピースやら、フリルのついたスカートと言った可愛らしい物ばかりで、手に取るのに背徳感がすごい。

時折母さんの下着なども出てくるため微妙に凝視しにくい。

と、これはなんだろうか、ハンカチか何かだろうか少し分厚い……

「眠い……………あ、おはよ……………」

そこにマユが起きてくる、寝起きは素直で可愛い。素直に可愛い。眠け眼が大幅なプラス点だ。

左手の裾でゴシゴシと顔を擦りながら、こちらを見る。

「早いねこー兄……………っ!？」

「ああ、おはようマユ」

漫画で覚醒した主人公が目を開くような感じで、ものっすごい目を見開く。

その目は俺が持っている、というか握っているハンカチと思わしき物体を凝視している。

顔がどんどん紅潮していく、というか凄い、本当に赤くなっている。

「こ、こー兄……………っ、それっ、握ってるのっ、何……………っ!」

あああわと口を小刻みに震えさせながら言うのが可愛い。

何だか可愛い可愛い言い過ぎていないか俺、いやまあ思ったことだから仕方がないんだけどね、変態みたいだ。

とりあえず慌ててるみたいなので朗らかな笑顔を返す。

これで落ち着くといいなあ……。

「何って、洗濯物だよ」

そう言って手に握り込んだ布を、手を開いて広げる。

ハラリ、と開いたそれは、T字（おおまかに見れば）。

というか、こども向けっぽいちよっと厚めの可愛らしいパンツそのもの。

おお、毒舌な妹はこんな純白履いてるのかあ……これは彼氏を殴りに行こうかあ〜な展開が無さそうで安心。

そんな思考な俺の前の妹様はどんどん赤くなってしまいには角が生えそうになっている。

ちなみに角というのは三倍のほうだ。

「それ握りこんで……何……しようとしてたの………」

「え、ちょ、ちょっとマユ、マユさん、どうしましたかっ!？」

「じ……この………」

「こ、この、なんでしようか」

「この妹の、本体じゃなくてパンツにしか興味無いのかド変態畜生オヤジと一緒に海草と結婚してやがれ変態っ!!!!!」

涙目で叫んで、俺の手からパンツをひったくる。

ああ……パンツ……。

「ただやるだけで見ちゃったーならまだしもそんな邪な目的で凝視しかも握り込むなんて本当に最低最低最低っ!」

今にも泣きそうな顔で、パンツを胸に抱えて怒る様はまさにそう、愛らしい。

そしてなぜだろう、少し胸が高鳴っている。

「ご、ごめんっ、気がつかなかったんだよそれがパンツなんてっ」

あ、何故か青筋が入った。

「ご、ごおの……出てけっ！てめえの大事なもの蹴り壊されたくなけりや今すぐ出てけこの変態の思いやりのない変態の野郎があー
ーーーーっ！」

今度こそ本当に泣きながら、真っ赤な顔で叫ぶ。

「ご、ごめん」

「謝るなっ出てけっ！」

俺を押し出して、扉を勢い良く閉める。
握り込んだのはわるかったけど……

「あんなに怒る必要ないだろう……」

少しへこむ。

そこに洗面所の隣の、階段から足音がする。

「おはようございます兄さん、マユの声が聞こえましたけど……」

「ああ、おはようユウ」

ハンカチと間違っつてパンツを握り締めてたんだよ、なんて素直に言おう物ならユウにも罵倒されそうで怖い。
でも嘘をついてもどうせ後でバレそうだ。

「兄さんのことですし、洗面所ということはハンカチとパンツを間違えて握り締めてしまつて、それをマユが見て怒つちやつたつてところですか」

「おお、大当たりだよ。どうしてわかつたんだ」

「兄さんのことはなんでもわかりますよ」

妹ですから、とはにかむような淡い笑顔で付け加えてくれる。
なんともこれも可愛らしい、俺が兄でなければ放つておかないぞ、放つておくほうが人類の損失ではないのかっ。

「嬉しいこと言つてくれるなあ、ユウは」

「ありがとうございます兄さん。でもマユちゃんも嫌いだから怒つてるわけじゃないと思いますよ?」

「まあ構つてくれるし、嫌われてはいないと思つけどね」

洗面所の締め切られた扉を見つづつ答える。

さっきのは俺にデリカシーがなかったせいだつてことくらいはわかる、最後に怒つたタイミングはよくわからなかったけど。
それにさっきの相手がユウだったら、

「兄さんは仕方ないですね」

とか言って笑ってくれそうなものだけど。

取り敢えず機嫌を取らないと、久方振りの一緒のご飯なのにギスギスしているのは嫌だし、今から一品朝から食べても良い感じな物を追加するか。

しかし二人とも、三年前とは変わってるようで変わってないなあ

.....

家事が好きなのじゃないけど（後書き）

パンツイベントとバッテリーイベントは必須。後皆妹好きすぎでしょう、私の他のシリアスとかに比べて最初から五倍近いつておかしいよね、本当最高だぜひゃっはークールがどこかへ消えていきそう。

朝食の風景

午前、8時半。

休日の朝食としては 本土にいた頃からしたら 早い。

あれからマユはむくれて一向に話を聞いてくれないが、この食卓に並んだ兵器たちで屈服させてみせる。

「……」 いただきます 「……」

丸くて大きい卓袱台を囲むように家族四人座る。

メニューは最初に作っていた和洋折衷な献立、米に味噌汁、ウイーンナーとサラダというのに加えて、マユの大好物だったはずのオムレツを作った。

ちなみに俺のオムレツは研究の結果、外はフワフワ中はトロトロを再現した物になっている。

「おいしいっ！コー君うまくなったねーっ！」

「本当においしいです……っ、に、兄さんがこんな料理を作れるなんて……」

母さんは目を輝かせて褒めてくれるし、ユウは物凄いシリアスな顔をしている。

人から褒めてもらえるのは素直にうれしい。献立の栄養バランスとかについてもこれから勉強すべきだろうか。

しかし、褒めてもらえるのは嬉しいのだが肝心のマユは、

「……………」

ムツスーと頬を膨らませたまま黙々と食べている。

「美味しくない！」とか言って突き返されるよりは全然いいんだけど、それでも何だか寂しい。

ここはやはりスキンシップを取って和ませ、美味しく食べる土台を作るべきか。

いや、作るべきである。

ということで真剣な顔でマユを凝視する。

「……な、なに」

くりつとした瞳をこちらに向けて、少し顔を赤らめさせている。

そのまま凝視しつつげながら、神妙な顔を作りつつ、そう、突拍子もないことを言えば滑ってもユウか母さんが突っ込んで和ませてくれるはずっ！

「マユ」

「だ、だから、なに」

「俺……………俺……………っ！」

視線は顔全体に、顔はしっかりとマユの方を向く。

ユウと母さんも何故か何かを察してしまったのか、俺のタイミングの計り間違えもあるだろうが黙る。

この空気はそう、本土に言って最初の自己紹介の時の空気。どんな面白い人なんだろうという期待の視線と同じだ。

これは、本当に大変なことを言ってツツコミに期待するしかないっ！

「俺……………妹萌えなんだっ！妹が妹の下着も臭いも大好きなん

だよおっつー！」

沈黙。

そして明らかな失敗。突っ込む兆しすらない。
自分でも、酷いと思う。

「お前らー、オヤジを海に捨てて家に帰るってなんだー、反抗期かー倦怠期かー愛情の裏返しなのかー」

とんでもないタイミングで帰ってきたな親父。あなたのせいで空気がさらに凍ったような気がする。

母さんが微笑んだままの顔で、箸を落とす。というか瞳から生気が消えています。

対してユウは驚いた表情で固まってはいるが何故か嬉しそうなそうでもないような。

淡く、雪のような肌の頬が桃色に染まる、それはもう芸術的に。
で、目の前にいるマユは手にもったままだった、空になった茶碗を落として顔を真っ赤にする。朝の赤さを軽く凌駕する勢いだ。

「真っ暗な森を一晩さ迷った親父の姿を見てみなさい？ ほうらこんなにボロボロ」

揚々と玄関から居間にやってきた親父も空気を読んだのか、飲まれたのか黙る。

親父がきつかけだったのか、ゲームのゲージが溜まるときみたいな溜めの後、爆発する。

「コ、コココココココココー君っ！？　そういうのは、そういうのは母さんダメだと思うなっ！？」

「兄さんっ、私に言ってくれれば下着がつまりまらなく感じるくらいのプレイをしましたよっ！」

「なななななななな、な、なにをなにを、下着！？臭い！？フェチズム！？妹に！？」

妹達が俺に覆いかぶさるように、母さんも青い顔で叫んでいる。

親父は「妹？下着？臭い？」と言いながら不思議な顔をしている。

「ちょ、ちょっとまで冗談だ冗談っ！」

「兄さん！隠し事は無しです大丈夫です受け入れます！」

「受け入れるってなんだ！というかユウ、お前昔そんなじゃなかったら！？」

「時は残酷です！」

「コー兄やっぱりそういう目的であれを……っ！」

「違うあれは事故だっ！ちょっとラッキーと思わなくもないけど事故だ！」

「妹に欲情なんて兄として最低！」

「まつんだマユ、俺は欲情していないっ！」

「ワタシに魅力がないっていいのか！」

「ある、あるけど欲情はしていないんだっ！」

「兄さん兄さん、妹に欲情するのは兄の務めです！」

「お前は3年の間になにがあつたんだユウ!？」

「見てください、こんなに可愛い子も言ってますよ!兄は妹で童貞を捨てるのだと!」

「待てユーミ、キャラが崩れてきてる!」

「マユの言うとおりだぞユウ!？お前もつとクールな感じだったはずだ!？」

「その通りです!クールですよ!しかしそれを捨て去る勇氣も大切っ!」

「ま、マユ、お前なんとか言ってく」

「ま、まさかさっきのパンツ以外にも盗ったか!？」

「まて何故そこまで話が戻る!？」

「ああ、なるほど。我がムスコよ、お前も男だなあ」

「親指立てるな何に納得したんだ親父!？」

「コー君、母さん別に近親相姦否定はしないけど、臭いフェチはマズイと」

「問題点はそこじゃない！」

「兄さん、もうここでいいです！捨てましょう大切なものを！童貞は投げ捨てるもの！」

「このポケットの膨らみに入ってるのはなんだ！ブラか！私のスーツブラなのか！」

「探せムスメ二号よ！兄の尊厳の全てをそこに置いてきた！」

「何を置いてきた親父！後無いから！欲情してないしもってないから！ってあ、だめ、そこは触るなっ」

「ユーミのがいいのか！私の下着は妹のモノでも子供っば過ぎてアウトか！」

「母さん、悲しい」

「父さんは子供っばいのもいいと思っつよ？」

「ユーミだって子供っばいの履いてるぞ！」

「ユウお前なんか暴露されてるぞいいのか！」

「兄さん……」

「ああダメだ妹は両方落ちたっ！両親は元からだけどっ！」

「冗談が破滅を呼ぶ……」。

嗚呼、学校への編入が明日からでよかった。

朝食の風景（後書き）

クールビューティーな貧乳妹のスポブラ吸いたい。

おっ買物っおっ買物っ　しかし買物描写はない

島に来てからまだ一日。

昔使っていた家具が残っていたから本土に行ったときのような、引越しの時特有の不便さや忙しさは無い。

けどそれでも足りないものもあるから、買出しに出なければならぬ。

もつとも、島の商店街はあまり大きくないし品揃えも良いわけじゃないから、探しているものがあるかは不安だ。

昨日の内に足りないものは確認したからいいけど、さっきまで続いたあの混沌とした状況は精神的に爪痕を残している。

「今後は安易な冗談は控えよう……」

よくよく考えたら妹に向かって妹萌えなんて、色々和不味いことを言った気もする。

まあ家族じゃなかったら即声をかけるくらいには可愛いから、あながち間違いでもないかなあ。

なんて思いつつ山に沿うような道を歩く。島にいくつか点在する商店街も、一番近くても小さな山一つ超えないとたどり着けないのだ。

本土にいた頃からは考えられない不便さ。

3年ぶりに懐かしい道を歩いて、古い家を店にした商店街に出る。本当に懐かしい、昔は学校からの帰りにここでおばちゃんとかにお菓子をもらったなあ。

足も軽快なりズムで弾む、さすがにスキップするのは気持ち悪い奴になりそうだからしないけれど。

そこで、見知った顔を見る。

「あれ、甲太？」

背の低い、マユよりも小さな、ちょっと大きい小学生レベルの背の女の子が呼びかけてくる。手ぶらだが肩から小さなキャラ物の鞆をかけている。

「甲太……甲太っ？い、いつかえったのっ!？」

「昨日だよ、久しぶり七葉姉さん」

駆け寄りながら真っ赤な顔で訪ねてくる夕子姉に落ち着いて言葉を返す。

それにしても……

「……背、伸びないね……」

「出会って一言目がそれっ!？」

「あ、じゃあ……相変わらず元気だけが取り柄だね？」

「それは沙智夏ちゃんだよっ!」

人のことは言えないと思うなあ……。

黒髪ロングで、きつと成長したら超美人なんだろうなあと皆に言われていたが結局全然（全体的に）成長せず、最近妙にメジャーになってしまった危ない趣向の人たちには絶大な人気を誇るであろう、完全な幼児体型。それでいて島でも有名な家の娘さんである、遠垣七葉20歳。

昔から親同士が何故か仲が良く、所謂幼馴染となった相手である。まあこの島では子供皆幼馴染同士なんだろうけれどね。

ちなみに彼女は島の高等学校の手伝いをして生活している。
採用基準がとつても知りたい。

「でも……よく帰ってきたね、おかえり。連絡くれてもいいのに……」

しみりとした口調で、最後は少し拗ねながら言う。

なんとというか、彼女は保護欲をそそる天才だと島を出る前から思っていた。

潤んだ大きな瞳、子供らしく少し赤い頬に薄い唇、艶やかな長い髪に華奢で小さな体躯はまさに少女。

……マユにも同じような感想を抱いていた記憶がある。

「ちよつと急だったしね、それにわざわざ連絡しなくても会うだろうし」

「でもおかえりなさいくらい言わせて欲しいよっ！」

小さな体全身で怒りを表現している。妹とはまた違った可愛さだなあ。

ああ、わかっていると思うけれど、俺は別に可愛いものが好きなんじゃない。ただ率直に可愛いなあという感想が出てしまうだけなんだ。

だから、許される。はず。

「確かにそうかな、ごめんねタチ姉」

「うう。わかればよろしー。」

うん、子供らしい。

「ところで甲太は買い物？」

「うん、服が足りなくてね。後は小物を」

「んー、じゃあ私は要らないかな？」

昔はタチ姉は、買い物に来た俺を見かけると手を引いて連れていってくれた。だからこれだけ背の違いつかが出て、3年もあつていなくてもお姉さんの血が騒ぐのだろうか。

「そうだね、要らないというか手を煩わせるまでもないっ」

「お、おお！かつこいいよその言い方！」

何度言ったかわからないけれど、子供っぽいなあ。

本土ではこんな純粋な人いなかったから、新鮮だな。いかなかったほうが良かったのかなと後悔もする。

「あつと、じゃあちよつと私はこれでバイバイだ」

「仕事？」

「うん、ちよつと呼び出されてるからね」

「そうなんだ、じゃあ頑張つて」

うん、と笑顔で頷いて駆けていくタチ姉。しかし遊ぶ約束に遅れそうな小学生にしか見えないのは、うん、きつと言わないほうがいいんだろうなあ。

さて、もう服屋は見える位置にある。
欲しいと思うような服があるかは置いておいて、調達はいいじつ。

おっ買い物っおっ買い物っ　しかし買い物描写はない（後書き）

繭子と七葉は造形が似てる系で幼児体系で可愛い系。後私は最初っから好感度マックスは一人と決めてる系なので繭子の好感度は毒舌の通り系。でも気分次第で変わる系。結局適当系でレッツラゴー系

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382y/>

sweet Island ~ 妹達とお兄さん ~

2011年11月29日23時51分発行